遺された者の使命

岐阜市立岐阜中央中学校 3年
豊吉 晃大

「誰かを失うのも人生の一部と呼ばなきゃいけないなら、どうか」「どうか」の後に、どんな言葉を続けますか。これを考えるきっかけは、ある日突然訪れました。

2025年2月13日、僕が後期期末テストのための勉強をしている時、曾祖母が亡くなりました。99歳でした。

曾祖母は元気な人でした。大きな病気もせず、80歳を超えても自転車でグラウンドゴルフに出かけるような人でした。僕にとって、「元気でいる」のが当たり前でした。

99歳の誕生日を迎えても、曾祖母は元気でした。しかし、僕の中で、曾祖母の存在は少しずつ小さくなっていました。当時、僕は中学2年生。勉強や部活動、自分のことで忙しくて、曾祖母のことは、二の次になっていたのかもしれませんが。そんな時でした。

両親から突然、「ひいばあちゃんに会いに行くよ。」と言われました。後期期末テスト直前で、勉強を追い込んでいた僕は、何で？とげげんに思いました。両親は、重ねて言いました。「今夜が峠かもしれないから。」

頭が真っ白になりました。すぐに会いに行った僕が見たのは、1年前まであんなに元気だった曾祖母の、目も開けられず、苦しげな姿でした。「声をかけてあげて。」と言われましたが、僕は黙ったままでした。何を言えばいいのか、分からなかったのです。

母に、「ひいばあちゃんも頑張っているから、晃大もがんばれ。」と言われました。僕は残りの2日間、死に物狂いで勉強しました。幸いにも、曾祖母は峠を乗り越えました。このままひいばあちゃんが元気になりますように。僕は勉強しながら、必死で祈っていました。

期末テスト当日。起きてきた僕を待っていたのは「おはよう。」ではなく、「ひいばあちゃんが亡くなった。」という知らせでした。

朝ごはんの間、登校中、涙が止まりませんでした。テスト中は、必死で問題を解きました。気を抜くと、また泣いてしまいそうで、歯を食いしばって問題に向かいました。その日の夜、お通夜に行き、曾祖母に会いました。もう苦しそうではなく、眠っているような、安らかな顔でした。どうして、何も言えなかったんだろう。僕はまた溢れてきた涙を、今度は止めることができませんでした。

「誰かを失うのも人生の一部と呼ばなきゃいけないなら、どうか。」これは僕の好きな曲の一部です。「どうか」の後に続くのは、どんな言葉でしょうか。どれだけ「どうか」と願っても、別れは必ず訪れます。どれだけ「どうか」と祈っても、別れた人とは会えません。それなら、僕はこう続けます。

「どうか、後悔しないように。」

曾祖母に会いに行ったとき、僕は何を言いたかったのでしょうか。今ならそれが分かります。僕はきっと「ありがとう」と言いたかったんです。今までありがとう。元気でいてくれてありがとう。優しくしてくれてありがとう。たくさんの「ありがとう」を、ありったけの言葉で伝えたかったんです。

周りを見渡せば、世間には心無い言葉やニュースが溢れます。誰かを馬鹿にして笑ったり、顔も知らぬ誰かを傷つけたり、存在を否定する言葉を笑いながら平気で使ったり。

その言葉の意味を知っているのか？本当にその人がいなくなったら、責任が取れるのか？それをした自分に後悔はないか？そんな場面に直面するたび、僕は怒りを感じます。

いつか来る別れがあるのなら、人を傷つけるのではなく、今できることを精一杯やるべきです。やりたいことをとことんやったり、身近な人を精一杯大切にしたりすることです。

時間には限りがある。だから、後悔せず生きる。それがこの世界に遺された僕たちの使命ではないでしょうか。

ひいばあちゃん、ありがとう。僕は後悔しない人生を精一杯生きます。